様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 １８ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０３２２

研究課題名（和文）２０世紀チェコの視覚芸術における文学的想像力のはたらきと意味

研究課題名（英文）The Function of the Literary Imagination in Czech Visual Arts in the 20th Century

研究代表者
赤塚　若樹（Akatsuka, Wakagi）

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：８０４０４９５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：本研究のテーマは、20世紀チェコの視覚芸術における文学的想像力のはたらきを、美術史的・文学史的・文化史的観点からだけでなく、歴史的・社会的・政治的文脈においても検討することにあった。絵画、写真、グラフィック・デザイン、コラージュ、映画、アニメーションといったさまざまなジャンルをあつかいながら、20世紀に開花したチェコの視覚芸術が、表現の点でも思想の点でも、文学と密接な関係を取り結びながら発展してきたことをあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have examined the function of the literary imagination in Czech visual arts in the 20th century, not only from the viewpoint of the art, literary and cultural history, but also in light of a social, historical and political context. In dealing with diverse genres such as painting, drawing, photography, collage, graphic design, film, I have elucidated that Czech visual arts that flourished in the 20th century have developed in close relationship with literature in terms of both expression and conception.

研究分野：映像文化・比較文学、中央ヨーロッパ文化

科研費の分科・細目：文学；ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：映像文化　中欧　視覚文化　表象文化論　東欧　美術史　文化史　比較文学

１．研究開始当初の背景

長年にわたって視覚文化について幅広く研究を進めてきた。なかでもチェコのヴィジュアル・アートには大きな関心を寄せており、おもな研究活動だけに話をかぎっても、たとえば 2008 年に著書『シュヴァンクマイエルとチェコ・アート』（未知谷）を上梓し、それまでの研究成果をまとめたほか、2007-2009 年度には科研費研究課題として「20 世紀チェコの視覚的想像力にかんする総合的研究」も行なった。これは 20 世紀前半からめざましい発展を遂げてきたチェコの視覚芸術において発揮される想像力のありようを、とりわけ映画、写真、絵画、そしてグラフィック・デザインをとおして検討することを目的とするものだった。

（1）こうした研究課題に集中的に取り組むなかではっきりと認識せざるをえなかったのは、視覚文化の研究においてはともすると無関係とみなされがちな文学――あるいは誤解をおそれずにいえば、視覚芸術と同列にあつかうのがためらわれがちな言語芸術、すなわち文学――がチェコのヴィジュアル・アートにあってはきわめて大きな役割を果たしているという事実だった。しかも、その様相はたんに無視しがたいというようなものではなく、もはやそれを考慮することなくしてこの領域について十全に語ることは決してできないといった類いのものになりえており、ひとつの研究テーマとしてこれをあつかう必要を感じていた。いい添えておくと、ここでいう「文学」とはいわば総称的な言葉であって、そこには関連する人、作品、表現、思想、あるいは環境、状況などさまざまな要素がふくまれてくる。研究課題名のなかの「文学的想像力」という表現もそのような意味あいでもちいている。

（2）他方で中・東欧の 20 世紀のヴィジュアル・アートは 21 世紀を迎えてようやくその研究が本格化したといえる部分がある。その背景には長いあいだそこに影を落としていた抑圧的な政治状況から、その地域が 1989 年にはじまる「東欧革命」によって解放されたこと、そして、そうした出来事からある一定の時間が流れ、文化・芸術をしかるべきかたちで検討する環境が整ってきたことがある。ときに現代社会はヴィジュアルの時代にあるといったことがいわれるなか、こうした状況をふまえてチェコの視覚芸術について調べていたら、逆説的にむしろ文学的想像力のあり方がきわめて大きな問題として浮上してきたということもあった。

本研究は以上のような状況のもとで計画・構想された。

２．研究の目的

本研究の目的は、上記のような意味での「文学的想像力」が 20 世紀のチェコの視覚芸術においてどのようなはたらきをみせ、またどのような意味を持ちえているのかを検証することにあった。ひとくちに視覚芸術といっても表現形式は多岐にわたり、本研究においてはそのなかでも映画、絵画、写真、グラフィック・デザインをおもにあつかった。そして作品が生まれてくる「場」と作品に見て取れる「イメージとことば」の問題――具体的には（a）芸術家と文学者のコラボレーションのあり方、(b)（文学者をふくむ）人的ネットワークの形成のされ方、(c) 原作としての文学作品とそのアダプテーション、（d）視覚芸術作品に取り込まれた文学表現という４つの問題――を、美術史的・文学史的・文化史的文脈を考慮するだけでなく、歴史的・社会的・政治的状況も視野に入れながら検討し、チェコの視覚文化の特質のきわめて重要な部分をあきらかにしていこうとした。

３．研究の方法

（1）チェコのヴィジュアル・アートにかんするこれ以前の研究でも、本研究に関連する資料もそれなりに収集しているが、さまざまな文脈を考慮しなければならない研究の性質上、決して十分とはいえなかった。この状況を改善するために、研究開始から全期間をとおして関連資料の収集につとめ、あわせてその分析も進めた。これと平行して以下のような視座から研究作業を行なうこととした。

（2）ヨーロッパでも有数の映画スタジオ（バランドフ）のあるチェコスロヴァキアはすぐれた映画を産出する国として知られている。本研究ではそのなかでもとくに国際的に評価の高い 1960 年代の〈チェコスロヴァキアのヌーヴェル・ヴァーグ〉とアニメーションを集中的にあつかう。映画のジャンルとしてはことなっているが、両者のあいだには社会主義体制のもと映画産業が国有化されたがゆえにたいへん高い質を維持することができたという共通点がある。こうした背景を考慮しながら、〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉とアニメーションが文学とどのような関係にあったのかを前述のようなさまざまな見地から――とりわけ文学作品のアダプテーションと文学者のコラボレーションという観点から――検討していく。

（3）映画のほかに、静止したイメージにもとづくジャンル――絵画、写真、グラフィック・デザイン、コラージュなど――の作品についても同様の視座から考察を行なう。こうしたジャンルの芸術がチェコで花開いたのは、20 世紀前半のアヴァンギャルドの時期であり、そこではポエティズムとシュルレアリスムが主導的な役割を果たしていた。そこで形成された芸術家たちの人的ネットワークがどのようなものであったかを調べ、そのなかで文学者たちが果たした役割についても検討していく。またこの時期には作品のテーマ、コラージュの素材、本の装幀などさまざまなレベルで、視覚芸術作品に文学表現あるいは単純に「文字」が取り込まれていった。

そこに浮上する「イメージとことば」の問題についても考察することとする。

４．研究成果

（1）チェコのヴィジュアル・アートにかんする文字資料や映像資料の収集を継続して行ない、研究のための環境整備をかなり進めることができた。なかでもここ数年のあいだに相次いで刊行されている映画人たち、とりわけチェコのヌーヴェル・ヴァーグの監督たちにかんするモノグラフや、名作とされながらソフト化されていなかった古い映画の DVD など、映画関連の興味深い資料を数多く入手することができた。またこれら資料を利用し、とりわけ理論的考察を進めるさい、きわめて有益な知見をもたらしてくれる最新の映像論・イメージ論にかんする書籍もあわせて入手した。こうした環境整備は本研究のみならず、今後の研究にとっても大きな意味をもつものと思われる。

（2）こうした資料の分析をとおして、20 世紀に開花したチェコの視覚芸術が、創り手のレベルでも作品のレベルでも、表現の点でも思想の点でも、文学と密接な関係を取り結びながら発展してきたことをあきらかにすることができた。本研究の結論をひとことで述べるとするならこのようになるが、そこにいたるまでにさまざまなことがらを考察の対象としてきたことはいうまでもない。活字媒体に発表してきた、そうした研究成果の概要を以下に記していく。

（3）〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉ついては、見方によってはチェコ「文学史」の一部をなしているとさえいえるほど、それが文学に支えられたムーヴメントだったことを確認した。「プラハの春」で頂点を迎える 60 年代の自由化・民主化の動きのなかでは芸術がさまざまな領域で花開き、文学では若い作家たちがすぐれた散文フィクション作品を数多く発表した。映画との関連で注目に値するのは、そういった作品の多くが時を移さず同じように若い映画監督たちによって映画化された点であり、たとえばアメリカのアカデミー賞の外国語映画賞を獲得したふたつの作品、すなわちヤーン・カダール、エルマル・クロス共同監督の『大通りの店』（1965）とイジー・メンツル監督の『厳重に監視された列車』（1966）も、それぞれラジスラフ・グロスマンとボフミル・フラバルの同名の散文フィクションを原作としてつくられたものだった。

また〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉の時期（1962、63 年から 1969 年まで）には文学者が映画制作に直接かかわることもあり、実り多いコラボレーションが実現している。たとえば映画学校（芸術アカデミー映画学部）で教鞭を執っていたミラン・クンデラは小説『冗談』がヤロミル・イレシュ監督によって映画化されるさい（1968）、みずから脚本を手がけている。またこの時期に３つの小説が映画化された作家ヨゼフ・シュクヴォレツキーは、映画評論家としてフラバル原作のオスカー受賞作にかんするモノグラフ『イジー・メンツルと「厳重に監視された列車」の歴史』（1982）のほか、チェコ映画史をたどる『ステキな若い男女のすべて』（1971）も著わし、チェコ映画を内部からも側面からも支えてきた。

以上のような事実を検証したうえで、〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉の時期に同時代の文学作品を原作として制作された映画、ならびに同時代の作家が制作に直接かかわった映画を調べたところ、該当する作品がこの短期間に 40 本以上もつくられていることが判明した。これはヴィジュアル・アートのジャンルとしての映画が文学的想像力によって支えられていたことをしめす証左といえる。同時代の文学作品ではないが、ネズヴァルが著わした小説『ヴァレリエと不思議な一週間』はヌーヴェル・ヴァーグの監督イレシュによって映画化されている。こうしたアダプテーションの事例も視野に入れながら調査を進めた。

（4）同様の視座からアニメーション映画をあつかったところ、その制作にも文学者、それも著名な詩人や作家が意外なかたちでかかわっていることがあきらかとなった。たとえばチェコの民話を題材としたイジー・トルンカ監督の長編アニメーション『バヤヤ』（1950）では 20 世紀前半のチェコ文学を代表する詩人ヴィーチェスラフ・ネズヴァルが作詞した歌が要所要所でうたわれ、それによって物語が導かれていく。トルンカと絵本をつくっている詩人フランチシェク・フルビーンはカレル・ゼマン監督の『鳥の島の財宝』（1952）で全編にわたって語られるナレーションの言葉を書き、同じゼマンの『悪魔の発明』（1958）では脚本も手がけている。ヘルミーナ・ティールロヴァー監督の『豚飼い王子』（1958）ではアンデルセンの原作を再構成したミラン・クンデラの言葉が全体にわたって語られていく。晩年のトルンカの『電子頭脳おばあさん』（1962）の原案は〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉の担い手たちと同世代の作家イヴァン・クリーマだった。なお、現在のクンデラの名声からするとかなり意外なことだが、ティールロヴァーとのコラボレーションについてはほとんど知られていない。また、クンデラがこの仕事をしたのが、まだ詩人として活動し、これから小説家への転身をはかろうとする時期にあたっている点も注目に値する。

（5）この数年間、編集・翻訳作業を進めてきた、チェコ・アニメーションをあつかう大部の書籍をようやく刊行することができた。アニメーションの黎明期から現在までの主要な作家のインタビューをまとめたもので、作家の言葉を通して、それぞれの時代における創造的想像力のありようがいかなるものであったかを検証することができる。この書籍はアニメーション文化という枠にとどまらない、チェコの視覚芸術全般の受容と研究

にとって有意義な情報を提供してくれるものと考えている。文学的想像力のかかわりについてもさまざまな事例をみつけることができる。たとえばトルンカの『バヤヤ』の制作を当局側が認めるかどうかを決める会議において、ネズヴァルが詩人コンスタンチン・ビーブルなどとともに後押しをしたというような興味深い事実も語られている。

（6）ヴィジュアル・アートと文学的想像力のかかわりのみをあつかうものではないが、チェコスロヴァキアの「正常化」時代に音楽家ユニオン・ジャズ部門がくりひろげた、芸術全般にかかわる活動についても考察した。そこでは音楽も視覚芸術も文学も区別されることなく、大きな芸術という枠組みのなかであつかわれている。そうしたジャズ・セクションの活動は本研究のテーマからしても注目すべきものであるため、継続して資料収集につとめた。ジャズ・セクションの活動にかんする調査・研究はつぎの科研費・研究課題として採択されているので、これから４年間に集中的に取り組んでいくつもりでいる。

（7）チェコスロヴァキアのヌーヴェル・ヴァーグを代表する映画監督、ヴィエラ・ヒチロヴァーの映画『ひなぎく』を多角的に検討した。制作当時の政治的・社会的状況の検証、先行研究の批判的読解、映像の特質にかんする考察、現在のガーリーカルチャーとのつながりの指摘などを行ない、この作品の特徴や今日的意義をあきらかにした。文学的想像力のはたらきそのものを調べるものではないが、チェコのヴィジュアル・アートが置かれている状況について有意義な分析を行なうことができた。

（8）同様に映像作家ヤン・シュヴァンクマイエルの作品をあつかいながら、チェコのヴィジュアル・アートの状況についても検討をくわえた。シュヴァンクマイエルの芸術観を調べ、そのなかで彼が重視する「韜晦」が遊戯性をそなえた偽装の形式にもとづく表現であることもあきらかにした。2011 年夏に開催された、シュヴァンクマイエル夫妻の展覧会の図録に論文を寄せ、ヤン・シュヴァンクマイエルの視覚的想像力が、作家によるモノとの無媒介の接触、ならびに偶然性を取り込む手法とともにあり、それらによって特徴づけられてもいることをしめした。

（9）付随的に隣接領域での研究も行なった。たとえば、①アメリカの映像作家ハリー・スミスの初期映像作品の背景を調査し、②抽象アニメーション作家オスカー・フィッシンガーが 20 世紀半ばにアメリカでくりひろげた活動を検討した。③ポーランドの作家・画家ブルーノ・シュルツが現代のさまざまなジャンルの芸術家にあたえた影響を具体的な作品の分析をとおしてあきらかにし、④日本のデザイナー石岡瑛子が手がけた、ポール・シュレイダー監督の映画『MISHIMA』のプロダクション・デザインの特徴・特質をあつかい、⑤日本のアニメーション作家、黒坂圭太の映画『緑子／MIDORI-KO』の独自性についても考察した。いずれも本研究課題の考察にも間接的に役立つものとなった。

（10）20 世紀前半のチェコスロヴァキアのアヴァンギャルド芸術においては、前述のとおりポエティズムとシュルレアリスムが主導的な役割を果たしていた。名称も傾向もことなってはいるものの、このふたつはじつのところ連続した運動だったといってよい。とくに参加した多くのメンバーが重なっており、たとえばリーダー的存在はどちらも批評家のカレル・タイゲと詩人のネズヴァルのふたりだったし、絵画においてはトワイヤンとインジフ・シュティルスキーがその中軸を担っていた。このトワイヤンとシュティルスキーを中心に、そこで形成された人的ネットワークがどのようなものであったかを検証し、文学者がそこで果たした役割も検討した。

チェコ独自の「イズム」としてあらわれ、チェコのアートの水準を一気に高めたポエティズムは、その名がしめすとおり「ポエム」すなわち「詩」を中心に展開された芸術運動だった。ここに端的に、そして象徴的にあらわれている文学との不可分の関係については、ヴィジュアル・アートの側から取り上げられることはあまり多くなかった。この状況にも配慮しながら研究を進めた。

また、芸術運動としてのポエティズムが推し進められた 1920 年代のチェコ文化を、ヨーロッパ文化というより広いコンテクストにおいて検討すると、都市文化ならびに大衆文化というテーマがきわめて重要なものとして浮上してくることがわかった。視覚芸術と文学の両方にもこの傾向がはっきりとあらわれている事実を作品の分析をとおして確認したが、論文としてまとめるまでにはいたらなかった。これについては今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 赤塚若樹,「20 世紀チェコの視覚芸術における文学的想像力のはたらき――映画を中心として」.『人文学報』第 491 号．2014 年．1-15 頁．査読なし．

② 赤塚若樹,「『緑子／MIDORI-KO』論」．DVD『緑子／MIDORI-KO』（黒坂圭太監督）付属ブックレット．ミストラルジャパン．2013 年．2-8 頁．査読なし．

③ 赤塚若樹,「映画『MISHIMA』における石岡瑛子の美術デザインをめぐって――様式化と約束事」.『PHASES』第 4 号．2013 年．48-72 頁．査読なし．

④ 赤塚若樹,「ヴィエラ・ヒチロヴァーの映画『ひなぎく』（1966）について」.『人文学報』第 476 号．2013 年．1-36 頁．査読なし．

⑤ 赤塚若樹，ラジスラフ・フクス『火葬人』（松籟社，2013 年）の書評.『週刊読書人』第 2982 号．2013 年 3 月 22 日．5 頁．査読なし.
⑥ 赤塚若樹，ラジスラフ・フクス『火葬人』（松籟社, 2013 年）の書評. 共同通信社（配信）．2013 年 3 月.
⑦ 赤塚若樹,「アメリカのオスカー・フィッシンガー――20 世紀半ばの抽象映画とその創り手の状況」.『PHASES』第 3 号. 2012 年．64-77 頁．査読なし.
⑧ 赤塚若樹,「〈グレー・ゾーン〉に生きる芸術――「正常化」時代におけるジャズ・セクションの活動について」.『思想』2012 年第 4 号（通巻 1056 号）．2012 年．237-261 頁．査読なし.
⑨ 赤塚若樹，ボフミル・フラバル『厳重に監視された列車』（松籟社、2012 年）の書評.『週刊読書人』第 2965 号．2012 年 11 月 16 号．5 頁．査読なし.
⑩ 赤塚若樹，加藤有子『ブルーノ・シュルツ――目から手へ』（水声社、2012 年）の書評.『週刊読書人』第 2943 号．2012 年 6 月 15 日．5 頁．査読なし.
⑪ 赤塚若樹,「ハリー・スミスの初期映像作品の背景について――あるいは実験映画のサンフランシスコ・ルネサンス」.『PHASES』第 2 号．2011 年．136-149 頁．査読なし.
⑫ 赤塚若樹,「ハリー・スミス　フィルモグラフィ」.『PHASES』第 2 号．2011 年．150-153 頁．査読なし.
⑬ 赤塚若樹,「韜晦という手法――ヤン・シュヴァンクマイエルの芸術観について」.『人文学報』第 446 号．2011 年．1-21 頁．査読なし.
⑭ 赤塚若樹,「ベティ・ミーツ・ジャズ――フライシャーのジャズ・カートゥーンについて」.『PHASES』第 1 号．2011 年．45-64 頁．査読なし.
⑮ 赤塚若樹,「〈検閲された 11 本〉をめぐって――カートゥーン映画論」.『思想』2010 年第 10 号（通巻 1038 号）．2010 年．79-99 頁．査読なし.

〔学会発表〕（計４件）
① 赤塚若樹，映画『緑子／MIDORI-KO』（黒坂圭太監督）・上映後のゲストトーク．アップリンク ROOM（東京・渋谷）．2013 年 12 月 23 日.
② 赤塚若樹，DIR EN GREY×黒坂圭太『輪郭』上映＆トークライブ．アップリンク・ファクトリー（東京・渋谷）．2013 年 6 月 2 日.
③ 赤塚若樹,「夜のポエティズム――赤塚若樹のアニメーション講座」．第 41 回（連続講演）．アップリンク・ファクトリー（東京・渋谷）．2011 年 12 月 17 日.
④ 赤塚若樹,「夜のポエティズム――赤塚若樹のアニメーション講座」．第 40 回（連続講演）．アップリンク・ファクトリー（東京・渋谷）．2010 年 10 月 30 日.

〔図書〕（計５件）
①（編集・翻訳）『チェコ・アニメーションの世界』．スタニスラフ・ウルヴェル編．赤塚若樹編訳．人文書院．2013 年．総ページ数 300 頁.
②（共著）『ブルーノ・シュルツの世界』．加藤有子編．成文社．2013 年．担当個所：赤塚若樹,「マネキン人形を手本として――ブルーノ・シュルツの『芸術的イメージ』」．141-166 頁.
③（分担執筆）『いま、世界で読まれている 105 冊』．テン・ブックス編．テン・ブックス．2013 年．担当個所：赤塚若樹,「ヴィーチェスラフ・ネズヴァル『ヴァレリエと不思議な一週間』」．134-136 頁.
④（分担執筆）『ヤン＆エヴァ・シュヴァンクマイエル展――映画とその周辺』．ACCESS．2011 年 8 月．担当個所：赤塚若樹,「ヤン・シュヴァンクマイエルのヴィジュアル・イマジネーションについて」．13-15 頁.
⑤（分担執筆）『ヤン・シュヴァンクマイエル 創作術』. ACCESS. 2011 年. 担当個所：赤塚若樹,「シュヴァンクマイエル年譜」．160-161 頁.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.asahi-net.or.jp/~tt2w-aktk/

６．研究組織
(1)研究代表者
赤塚　若樹（AKATSUKA, Wakagi）
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：80404953